

東大見学会・企業大学訪問感想文

1. 笹川平和財団・日本財団ディレクトフォース共催夏季プログラム「世界を視野に、自らを生かす。」

まずは、前国際エネルギー機関事務局長でおられる田中伸男さんからお話をいただいた。主にエネルギー問題に関する内容であったが、私はこの問題に関心があったものの、「どんどんドイツのように再生可能エネルギーを導入していけばよいのではないか」という安直な考えを持っていたのだ。しかし、そう簡単にはいかないようなのである。財政面はどうするのか？石油・石炭等化石燃料輸出国の利益はどうなるのか？それを理由に戦争が起きたら安全保障はどうするのか？そして、自分たちの国だけが再生可能エネルギーを利用し発展するのが本当に正しいのか？多くの課題が絡んでくるのである。私が最も驚いたのは、「集团的エネルギー安全保障」という考え方である。簡単に言うと、ある地域で電力をシェアするという考え方なのだが、アジアでも日本、モンゴル、東南アジアまでもをつなごうという構想が存在するのだ。これは、一つの理由として東日本大震災の苦い経験が挙げられる。東西で周波数の異なる電力を使用していたために、西日本から東日本へ電力を供給することができなかったのだ。この構想が実現すれば、資源は違えどオイルショックのような事態による経済の混乱を回避でき、地域の安定にもつながる、というわけだ。田中さんはこんな内容のことをおっしゃっていた。「原発事故が人災だったことを例に取っても、結局どれだけ技術が進歩したところで、人が考え発案し対応していく姿勢がなければ大きな課題は解決へ向かわない」自分で考え、こうすることがどれだけ大切かが分かった自主自律のチャンスが豊富な二高で、それを意識し行動すれば私たちは社会の中で大きな役割を果たせるのではないだろうか。

次に、講演後に行われたグループセッションについて書きたいと思う。お話していただいた内容を詳しく紹介することはできないが、総じて感じたことがいくつかある。それは、一つ一つの行動に付随する責任の重さ、である。大人にはそれがあるから、軽率な行動はとれない。なんでも独断では決められない。周囲の大人に守られ、責任などほとんど問われることのなかった私たちが大人になるための大きな壁だと感じた。それを乗り越えずこのまま社会に放り出されたら、私たちはどうになってしまうのだろうか？窓から見えた高層ビルが責任の塊にも見えた。二高のある先生もおっしゃっていたが、私たちは自分のことで精いっぱい利己主義に陥ってはいないだろうか？部活動等でも、自分が責任ある行動をとり、周りと信頼関係を築くことでその「壁」を乗り越えられるのだと思う。

職業観についてもお話をいただいた。実に簡単であった。自分が楽しいと思うことを仕事にするのである。ここでいう「楽しい」は、私たちなら分別をつけられるだろう。前に書いたような厳しいこともつきものなのだが、社会には達成感、いや、そう一言で表してはいけないような楽しい何かがあ

るようなのである。それくらい分かる。反省の意も込めてだが、私たちは細かいことに捉われ過ぎて考え方を狭めきっている。外国で活動することを例に取ってみる。治安？衛生面？前述の「楽しみ」に比べたら、細かいことに当たるのではないか。固まっていた考え方を融かし、様々な世界を見せてくださった田中伸男さん、SPF、TNF、DFの皆様には感謝感謝でいっぱいである。

2. 企業訪問・株式会社アクセルスペース (AXELSPACE) 様

私たち二班は、アクセルスペースという企業を訪問させていただいた。その名の通り宇宙開発、小型衛星の開発を行っている企業である。驚くべきは、民間で宇宙開発をしている企業はここだけ、しかもベンチャー企業という点である。東京大、東京工業大の共同研究室から独立、起業したのだ。たとえ技術力があっても、こんな未知の分野に足を踏み入れる企業に資金を貸す企業、個人はいるのだろうか？疑問でいっぱいであった。しかし、事業の実現可能性、開発、資金運用等を事細かに書類にまとめ、相手先に熱弁することで信頼を勝ち取り、資金を貸してもらったというのである。自分たちが実現したいことにはここまで本気で向かっていくのか……。私は驚き、保守的な考えばかりの自分と比較した。ベンチャー企業は創業者の強い意志で創業されたからベンチャー企業というのか、とも思った。建設的な考えと熱意があれば、人を動かせるのだ。細かな技術は私たちの知識でそのものすごさを到底理解することはできない。しかし挑戦する気持ち、熱意から始まった事業が社会的に必要とされ始めていることに、私たちにもそのようなことができるのではないかという、何か元気のようなものをもたらした。



3. OB, OG との懇談会

一日目の夜は二高 OB で東京大へ進学された方々との懇談会であった。主に勉強法、東京大での生活、その後の進路についてのお話をいただき、最後に質問をさせていただいた。皆さんのお話を聞いて思ったことは、自分の専門分野への情熱が半端ではないということである。東京大に入り、自分の惹かれた分野を最高の環境で突き詰めていっている……。そんな皆さんからいただいたアドバイスの

中で最も心に残っているのは、「いろいろなものに触れ、見識を広げて自分のしたいことを見つけよう。勉強は取舍選択を念頭に、効率重視で。時間を見つけてやっつけてしまおう。」という言葉だ。皆さんは学年トップクラスの頭脳を持つ方々には違いないが、それは時間の使い方が優れていることに支えられていたのだろう、と思った。凄い凄いと感心するばかりでなく、私もその向上心と自己管理の賢さを取り入れていきたい。仙台駅で英樹先生がおっしゃっていた、「今から覚悟を決めて努力すれば、東大も十分受かる」東京大へ進学した方々の勉強に対する姿勢を実践すればこの言葉も夢で終わらないのではないだろうか。

4. 東京大学オープンキャンパス

東京大本郷キャンパスに到着し正門から入ったところでまず驚いたのは、東大出版の屋台で入ってき高校生と対話、討論している東大生の方々の姿だった。この目の真剣さと輝きには、ソクラテスもびっくりである。構内を歩いていくと、法文館、安田講堂などが見えてきた。この時、ふと頭に「学生運動、安田講堂事件」という単語が浮かんだ。東大出版での学生さん、文学部展示でイスラムに関する話を話してくださった学生さんの熱さを感じたからかもしれないが学問への情熱、真理追求のような姿勢が、今も昔も変わらない東京大の気風なのかと思った。その後教養学部、文学部の教授が執筆した本を読みに行き、最後に行列ができるほど人気であった法学、政治学の講義を受けた。平等な社会は実現可能かというテーマであった。自分が無知の状態に置かれたとし、平等をどのような理由で選択するかという実験で、その思考過程を見ることで「情けは人のためならず」という人間の考え方の特徴を結論として証明していた。一見社会学に近く見える話題が、諺までつながってくるのである。フィールドの広さに本当に圧倒された。自分もこんな講義をもっと受けたい。もっと社会のことを知り、勉強していこうと思った。(本読もう。)



最後に 全体を通しての感想

今回の東大見学会・企業大学訪問は本当に自分にとってプラスになった。夢を叶えた人、レベルの高い舞臺で活躍している人々は、その活躍の裏に大きな苦勞や努力があったのだと分かった。私が講義を受けるため暑い中外で待っているときに私の前後の人は単語帳を開き勉強していたのである。私たちも負けてはいられない。周りだって少しはあそんでいるし……。など甘い考えはもうやめ、どんどん自分から勉強していきたい。いろいろな人から「自分がしたいことは何か」という問いを投げかけられ、活

躍している姿を見て、自分のぼんやりしていた将来像もはっきりし始めた。ぼんやりしていたのは自分の道は自分で開くという意志が弱かったからだと気付かされた。この経験は自分が勉強で辛くなった時のモチベーションの大きな支えとなる。あとは自分が努力するだけだ。このような機会を用意して下さった先生方を含む多くの皆様、本当にありがとうございました。